

後続音を持たない撥音の音声実現についての予備的研究

石原 淳也

1 はじめに

伝統的に、日本語には「ん」で表記されるいわゆる撥音という「音」が存在し、他の「音」とは性質が異なるものと考えられてきた。これは現代の音韻論においても、一つの独立した音素であると考えることができ、日本語音韻論では、/N/ として表記される。

日本語は基本的には開音節言語と言えるが、日本語において、/N/ は、促音 /Q/ などとともに必ず閉音節を作る、すなわち、言語一般的な音節構造を C_1VC_2 とすると、いわゆる音節の末尾子音 C_2 の位置にしか来ることができない。また、/N/ は、/Q/ と同様、その音声実現が一拍分の長さを持つという特徴を持つ。

さらに、/N/ は、多様な分節音をその音声実現としてとることでもよく知られている。「本（ほん）」を例にとれば、/N/（「ん」）は、「本箱（ほんばこ）」の場合は [m]、「本棚（ほんだな）」の場合は [n]、「本が（ほんが）」の場合は、軟口蓋鼻音と、後続音が閉鎖子音である場合には、調音位置が後続音と同じ鼻音として実現される。つまり、閉鎖子音が後続音の場合、調音位置が後続音に同化する、いわゆる逆行同化が起きるのである。

また、後続音が閉鎖子音でない場合でも、後続音がある場合は、閉鎖音の場合のような、きれいな逆行同化とは言えないまでも、逆行同化と同様、後続音の弁別素性が /N/ に強く影響することはよく知られている。

2 問題の所在と先行研究

一方で、/N/ が後続音を伴わない場合、すなわち、/N/ の後にポーズが来る場合、/N/ がどのような音声実現をとるかについては、今まであまり詳しく検討されていない。

佐久間 1929 は、後続音を伴わない /N/ が、軟口蓋音として実現されるとしたが、服部 1930 はこれを否定し、後続音を伴わない場合、/N/ は口蓋垂音として実現されると主張した。これ以降、服部 1930 に面と向かって反対する意見は見られず、後続音を伴わない /N/ が口蓋垂音として実現されることは、半ば常識とされてきた感がある (Vance 1987, 2008, Labrune 2012, etc.)。

しかしながら、簡潔ではあるものの、後続音を伴わない/N/が口蓋垂音以外の音声実現をとることが示唆されている記述もない訳ではない。

例えば、斎藤 1997 では「ぎん」において「ん」が口蓋垂音と記述されているが、その改訂版である斎藤 2005 では、「ぎん」の「ん」は軟口蓋であると記述が変更され、前舌母音の直後では軟口蓋音、後舌母音の直後では口蓋垂音になると説明が加わっている。また、同様の記述は上村 1978, 1989 にも見られ、前者において、「閉鎖の位置は先行のフォネームの種類によって変化する。i のあとでもっともまえで、a, o のまえ(「うしろ」の間違いか)でもっともうしろである。」という説明のあと、「印」の「ん」が軟口蓋音で示されている。しかしながら、これらの記述は少々簡潔過ぎて、議論が十分につくされていないように見える。

後続音を伴わない/N/の音声実現のより客観的な記述には、多くのデータが必要となるが、本論文では予備的な研究として、筆者の発音、内省から、後続音を伴わない/N/の音節主音である母音、頭子音 (onset) によって/N/の音声実現がどのように影響を受けるか整理してみる。

以下の表は、横軸に撥音を含む音節の主音となる母音音素、縦に同音節の頭子音を取ったもので、これら二つの要素の組み合わせが、末尾子音である撥音にどのように影響を与えるかを示している。

	/aN/	/iN/	/uN/	/eN/	/oN/
V	答案 [to:aN]	学院 [gakuiŋj]	阿吽 [auŋ]	亜鉛 [æeŋ]	和音 [uɑŋ]
k	果敢 [kakaN]		家訓 [kakuiŋ]	火炎 [kaeŋ]	紺 [koN]
g	癌 [gaN]		群 [guŋ]	加減 [kageŋ]	華嚴 [kegoN]
s	三 [saN]		採寸 [saisuN]	左遷 [saseŋ]	農村 [no:ioN]
z	火山 [kazaŋ]		ズン [dzuŋ]	座禅 [dzadzeŋ]	保存 [hodzoN]
t	最短 [saitaŋ]	ティン [tʲiŋj]		点 [teŋ]	駐屯 [tʃu:toN]
d	段 [daN]		ドゥン [duŋ]	伝 [deŋ]	呑 [doN]
n	柔軟 [dʒu:naŋ]		云々 [um:ruN]	記念 [kʲineN]	観音 [kannoN]
h	模範 [mohaN]		古墳 [kohuŋ]	可変 [kaheŋ]	本 [hoN]
m	我慢 [gamaN]		ムン [muŋ]	側面 [sokumeŋ]	家紋 [kamoN]
j	ヤン [jaŋ]		ユン [yuŋ]		四 [yoN]
r	攪乱 [kʌkuiŋaŋ]		ルン [ruŋ]	可憐 [kaeŋ]	持論 [dʒi:roN]
w	鉄腕 [tetsuɑŋ]	ウイン [uiŋj]		ウエン [uɛN]	
b	晩 [baN]		文 [buN]	花卉 [kabeŋ]	お盆 [obon]
p	パン [paN]		三分 [sambuN]	一片 [ip:eN]	一本 [ip:on]
ɸ	ファン [ɸaŋ]			フェン [ɸeŋ]	フォン [ɸon]
ts			ぼつん [potsuŋ]		
kj	おきやん [okʲaŋj]	砂金 [sakʲiŋj]	キュン [kʲuŋ]		キョン [kʲoŋ]
gj	ギャン [gʲaŋj]	銀 [gʲiŋj]	ギュン [gʲuŋ]		ギョン [gʲoŋ]
sj	シャン [caŋj]	写真 [caeiŋj]	立春 [rʲi:ɕuN]	シェン [ɕeŋ]	ション [ɕon]
tj	チャン [tcaŋj]	家賃 [iatciŋj]	チュン [tɕuŋ]	チェン [tɕeŋ]	チョン [tɕon]
dj/zj	ジャン [dcaŋj]	魔神 [mazin]	順 [dɕuŋ]	ジェン [dɕeŋ]	ジョン [dɕon]
nj	ニャン [naŋ]	六人 [rokuŋiŋj]	ニュン [ɲuŋ]		ニョン [ɲoŋ]
hj	ヒャン [ɕaŋ]	作品 [sakuɕiŋj]	ヒュン [ɕuŋ]		ヒョン [ɕoŋ]
mj	ミャン [mʲaŋ]	国民 [kokuŋmʲiŋj]	ミュン [mʲuŋ]		ミョン [mʲoŋ]
rj	リャン [liŋ]	五輪 [gorʲiŋj]	リュン [rʲuŋ]		リョン [rʲoŋ]
bj	ビャン [bʲaŋ]	瓶 [bʲiŋj]	ビュン [bʲuŋ]		ビョン [bʲoŋ]
pj	ピャン [pʲaŋ]	ピン [pʲiŋj]	ピュン [pʲuŋ]		ピョン [pʲoŋ]
ɸj		フィン [ɸʲiŋj]			

3 考察

データが筆者一人のものとは限定的ではあるが、後続音を伴わない/N/が、常に口蓋垂音となるとは言えないことを示すのには十分である。また、このデータからは「前舌母音の直後では軟口蓋音、後舌母音の直後では口蓋垂音」、「a, o のあとでもっともうしろ」と言い切る訳にもいかない。

音節主音となる母音だけではなく、/N/を含む音節の頭子音も/N/の音声実現に影響を与えていることが分かる。

しかしながら、これは、/N/が後続音を持つ場合の逆行同化とは事情が大きく異なるように思われる。先に触れたように、後続音が閉鎖子音である場合、逆行同化が起こり、/N/は後続音と調音位置を共にする鼻音として実現される。/N/の

音声実現が、単なる順行同化であれば、後続音が閉鎖音の場合の逆行同化と同様、/N/の音価は音節主音の母音によって自動的に決まるはずだが、そうなっていない。音節主音が/i/ であっても、/N/は多少の硬口蓋化を除き、調音位置が硬口蓋まで大きく動くことはないのである。このことは、後続音を持たない/N/の音価を決める要因が同化ではないことを示唆している。

表を見て分かるように、/N/が後続音を持たない場合、状況が許す限り/N/は口蓋垂へ近づこうとするが、音節主音が/i/ や/e/ の場合、/N/は軟口蓋で調音される。しかし、表から分かるように、音節主音が/u/であったり、頭子音が軟口蓋に近い場合も、実は、/N/は軟口蓋音になりやすい。

これは、解剖学的、生理学的な理由によると思われる。口蓋垂は下方へ湾曲した口蓋の一番奥よりの部分なので、この位置に閉鎖を作るには中舌面が下降していなければならない。中舌面が上昇していると、口蓋垂で閉鎖を作る前に、中舌面が軟口蓋に触れてしまう。

/o, a/ の後ろで口蓋垂音となりやすいのは、これらが、上村 1978, 1989 や齋藤 2005 の言うように奥舌の母音だからなのではなく、開口度の大きい、下よりの母音だからなのである。

参考文献

- 上村幸雄 1978 「現代日本語の音韻体系」
 『日本語研究の方法』松本泰丈編 むぎ書房
- 1989 「日本語（現代 音韻）」
 『言語学大辞典』（中巻）pp.1692-1716 亀井ほか編
- 齋藤純男 1997 日本語音声学入門 三省堂
- 2005 日本語音声学入門（改訂版）三省堂
- 佐久間鼎 1929 日本音声学 京文社
- 服部四郎 1930 「『ン』に就いて」 音聲の研究 3 pp.41-47
- Laurence Labrune 2012 The Phonology of Japanese Oxford
- Timothy J. Vance 1987 An Introduction to Japanese Phonology SUNY
- 2008 The Sounds of Japanese Cambridge